

ナラズ、聽テ典藥頭ニゾ申成サレケル。○下

〔醫者談義二〕配劑大小之談義

其比○織田信長ノ時天下に道三といふ名三人あり。○中一人は曲直瀬一溪翁道三なり。○中其名天下に聞えたり、今世上に用ゆる所の服藥の分量、水一杯半入て一杯、煎法常のごとしといふ法は、此道三より極れり、かるがゆへに、新流を當流といひ、古流を他流といふ、包形も、當流他流ともに昔は皆小包は香包にせしを、片臂驢菴の片手にてつ、まれしより、半井流は山形包なり、上包を劔形に包に、右は短く、左は長くするは、出の字の形也、發散催生一切病を去出すに用ゆ、左短く、右長くするは、入の字の形なり、反胃、膈噎、不食、虫積等の病を治するに用ゆ。○中凡藥に甘草の入は、峻なる藥味のあるには、和緩ならしめんがためなり、生姜の入は、表達引用のためなり、棗の入は、脾氣を助養するが爲なり、道三の撮甘草、片生姜一粒棗といふは、甘草多ければ、和し過して餘藥のちからうとし、生姜多ければ、逆上の害あり、棗多ければ、胸膈に變て食することあればなり、藥の拵やうも、麻豆のごとしとは、麻はあさだねなり、豆はあづきなり、藥のつぶの大きさ、麻だね小豆のふとさなり、粗からず、細ならず、中庸の刻かげん、是當流の法なり、古流は細末を用ゆるなり、然るに此頃は、藥品の彩色を好で、角こしらへにするは、病家に街ふなり。○中道三の切紙に、一番に水天目に一ツ半入て一ツに煎じ、二番は、一ツ入て半に煎ずとあり、此天目といふもの、むかし高麗の天目山にて焼し茶わんなり、是にも大小ありといへども、大やう、水八十目入を正とせり、八十目は明朝の半斤なり、明の一斤は百六十目なり、是を廣秤といひ、又大秤ともいふ、半斤を半秤といひ、小秤とも云ふ、故に水は半秤を用ゆ、天目に一杯は京升に二合入、京升一合に水清上なるもの四十目入る、然れば天目に一杯半は、水目百二十目、京升に三合入なり。○中然して當家の配劑の服量、貳分五分をかぎりとし、是兩の四分の一、水廣秤の四分の三と配合す。○中然るに近